日野富子

平岩弓枝

読売新聞社

日野富子（ひのとみこ）
昭和四十六年一月三十日　第一刷
著　者＝平岩弓枝（ひらいわゆみえ）
発行者＝二宮信親
発行所＝読売新聞社
東京都中央区銀座三の二の一　〒一〇四
大阪市北区野崎町七七　〒五三〇
北九州市小倉区明和町一の二　〒八〇二
印刷所＝凸版印刷株式会社
製本所＝協和製本株式会社
定価　五五〇円
©, Yumie Hiraiwa, 1971

目

次

日野富子　五
密　通　九九
おこう　一三九
居留地の女　一八三

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

心中未遂　二一七
夕映え　二五三
鬼盗夜ばなし　二八七

装丁　佐多芳郎

日野富子

美少女

その頃の京童の噂の第一は、今年十六歳になった日野家の姫、富子の美少女ぶりについてであった。

富子の美しさが評判になったのは、彼女が十二、三歳の時分からで、或る者は

「衣通姫の再来」

といい、或る者は

「昔語りのなよたけのかぐやとは、日野家の姫のような御方をいうのであろうか」

と讃え合った。

日野家といえば、藤原鎌足の血を引く名門で、最高とはいえないまでも、当代一流の公卿で、富子の父は前内大臣であり、裕福のきこえも高かった。

名家の姫で、美しく才たけていれば、それだけで洛中の噂になる筈であったが、富子の騒がれ方

が並大抵でなかったのには理由があった。

彼女の美しさをかいま見た者が極めて少なかった故である。好色には勇敢な貴公子達の中には、早くから日野家の奉公人を手なずけて、なんとか富子の許へ忍ぼうと試みたが、それらはすべて無駄であった。

富子の起居する館は、日野家の中でも最も奥まって居り、その周囲は兄の勝光の指図で四六時中、きびしく警戒されていて、それこそ蟻の這い出るすきまもなかった。

まして、夜は必ず、勝光が妹の部屋で同衾するという。

「幼児ではあるまいし、成熟した男と女が、たとい兄妹でも、毎夜、衾を共にするとは……」

それを耳にした人々の中からは、近親相姦の疑いも湧いたが、それは富子という美少女像を少しも傷けることにはならず、むしろ、神秘的な、この世ならぬ想いを加えた。

実際、日野家に古くから奉公している者たちの眼にも、勝光の妹に対する溺愛ぶりにはしばしば肝を抜かれた。

もともと、裕福な家である上に、当時、勝光は幕府と宮廷との間の取次役とでもいうような伝奏の役目を承っていて、職業柄、双方からの贈物が多く、賄賂も公然であった。

その財のすべてを、勝光は妹に費消した。富子の身を飾るもの、衣裳、宝玉の類から、金銀細工

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の手廻り品、調度類など、すべて贅沢の限りを尽した。勿論、教養のほうも怠りなく、和漢の学問から和歌、詩文、習字、管弦に至るまで、当代一流の師をまねいて一流の貴婦人としての教育を行った。

つまり、富子は、この兄によって心身共に一流の中で育て上げられたわけであった。

稀に葵祭の見物などで、富子が他出する時は、必ず、一つ牛車の中に勝光が居た。そんな場合、勝光はまるで富子の美しさを誇示するように、一瞬、高々と簾をあげてみせたりした。

康正元年正月二十日。

その日も、富子はゆっくり目ざめた。

昨夜、一つ衾に添い伏した兄は、知らぬ間に起き出して行ったとみえて、富子の隣は藻抜けの殻だったが、それはいつものことで、富子は気にも止めなかった。

「おめざめでございますか」

富子が身を起す気配を待っていたように、次の間から、乳姉妹であり、子供の時から身のまわりの世話をしてくれているみよしという娘がそっと声をかけて来た。富子と同じ十六歳だが、小柄で丸顔だから一つ二つ、年下にみえる。

「今朝は殊の外、冷えました……」

だが、部屋にはすでに火桶がいくつも運びこまれていて、気持よく空気が暖まっていた。
軽く身じまいを直して、朝餉をすませる。
それからが化粧であった。富子は時間をかけて、楽しみながら化粧をする。
その頃になって、富子は館の中がいつもより騒がしいことに気がついた。いつも、衣ずれの音しかきこえないようなこの建物の周囲にも、あわただしく行きかう人の足音や、話し声が洩れる。
「御存知でございましょうか、今日、将軍さまがお成り遊ばすそうでございますよ」
今朝になって、はじめて知らされたのだとみよしは正直に目を丸くしていた。
「先だって、旦那様がお手に入れられた明国渡来の観音像を、ごらんに入れるとか……表はお仕度で大さわぎでございます」
みよしの話を、富子は無関心にきいていた。
この館に、どんな客が訪れようと、かつて一度も、富子が挨拶に出向くということはなかった。兄は全く、それを富子に望まなかった。従って、今日の訪客が、室町幕府の当主である将軍、足利義政であったとしても、それは富子にとって無縁のことであった。
部屋の中に、香の匂いが流れていた。
香炉に高価な香木が惜しげもなく焚べられ、その上に富子の衣裳が広げられて、くまなく香を薫

きこめている。
ふと、それを目のすみにみて、富子はおやと思った。新しい衣裳であった。それも、いつもより格別に豪華な唐織りの小袖が重ねられている。重ねの色目は紅梅で、これは富子の最も好むものであった。
「それは……？」
富子の問いに、みよしが即答した。
「旦那さまのお申しつけでございます」
やがて、とっぷりと香がたきこめられた小袖が侍女たちの手で、富子に着せられる。
何人もの手に、体をまかせながら、富子は次第に不安になった。
兄の勝光が顔をみせたのは、着つけがすっかり終ったところであった。
「よう、お似合いだ……」
かなり、はなれた位置で、勝光は吐息と共に賞めた。近づいて来て、化粧をもう少し濃くするように言い、富子の全身を確かめるように見上げ、見下した。
「持仏堂に将軍家がお成りになっている。お目にかかるのだよ」
なんでもない声である。

富子は兄をみつめたが、勝光の表情は茫漠として摑みようがない。
廻廊は冬の陽が鮮やかに射し込んでいる。
勝光のあとから富子が行くと、一足ごとに馥郁と香が流れた。
すらりとした勝光の後背が、緊張していた。
珍らしいことだと富子は想う。どちらかというと感情を言葉にも顔色にもみせない兄であった。動揺したり、とり乱したりということが全くない。水のように静かで、それが人によっては冷たい印象を与えるらしいが、富子にとっては又となく頼り甲斐のある兄であった。どんな場合でも、この兄には安心してよりかかることが出来たし、甘えることが出来た。
その兄の後姿に僅かだが、翳りがあった。廻廊を歩む足どりに、かすかなためらいが感じられる。
何故だろう、と富子は考えた。常にないことである。そういえば、今朝の兄は常にないことばかりをしているようであった。
前もって富子にみせたこともない新しい衣裳を着せたことも、化粧の指図をしたことも、そして、富子に異性である来客に挨拶することを命じたのも、かつて無いことばかりであった。
みよしも話したように、今朝の客は将軍義政であった。武家社会では最高の権威者ではあった

が、それが兄の緊張の原因とは思えなかった。
日野家では、足利家へは三代の義満、四代義持、六代の義教と、代々の将軍に正夫人をおくっている。いわば、姻戚関係にあり、当代将軍の義政にしても、母の日野重子は勝光、富子兄妹の祖叔母に当った。いってみれば血縁である。
第一、官位からいえば右大将に任ぜられたばかりの若い将軍より、もっと高位高官がこの館には始終、出入りをしている。
今日の客が将軍だということだけで、兄が特別に緊張する理由はなかった。
持仏堂の内部は暗かった。
明るい渡殿を歩いて来た富子の眼に、観音像の前に座っていた貴公子の姿がはっきり映るまでには、少々の時間がかかった。
「そなたが、富子か……」
若い将軍の声には強い感動があった。我を忘れたように、不躾な視線を富子の全身に集めている。
「聞きしにまさる……」
恍惚として義政が口走った時、富子はうずくまっている兄の肩に満足と後悔が激しく揺れるのを

見た。

その日、義政は深更まで、日野家に滞在したが、富子は持仏堂で簡単な挨拶をしたきり、奥御殿へ戻り、あとは全く義政の前へ姿をみせなかった。彼女の意志ではなく、兄の指図であった。

「右大将様が何度も姫様をお召しになったのに、その都度、旦那様がはぐらかしておしまいになったので、とうとう右大将様は癇癪を起してお帰り遊ばしたそうですよ」

表からの知らせを、乳母が可笑しそうに話すのをききながら、富子は葵祭の時と同じ手段だと気がついていた。

牛車の簾を一瞬だけ高々と巻きあげさせ、富子の美貌に衆目が集ったとたんにさっと簾を下してしまう。二度と巻き上げられない簾の奥の姫が、群衆にはより神秘的に、より妖しい美しさの効果をもたらすと計算ずくのやり口であった。

侍女たちの間では将軍義政の品定めで話がはずんでいた。

まるで、堂上方の若君のようだというのが大方の印象であった。武士の頭領らしい武ばったところが少しもなく、学問好きな貴族趣味の青年であることが、女たちに好ましくみえたらしい。

事実、そのように育てられた将軍であった。

義政が八歳の時、家臣である赤松満祐に殺された父・義教が武断政治を強行したのにこりて、義

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com